

「IRに関するワーキンググループ」中間報告

企画調査室

大学教育における学習成果（ラーニング・アウトカムズ）の把握が求められ始める中、本年4月に全学自己点検・評価委員会の運営を担う「企画調査室」の中に、「IRに関するワーキンググループ」が設置された。

目的	創価大学におけるIR機能の設置検討
設置	2011年4月1日
任期	2年（2012年度末までに答申を提示する）
主任務	本学におけるIR設置目的（射程）、位置づけ等の検討 各部局（各学部や事務局など）の既存諸データの把握と今後必要なデータの割り出し 学習成果に関するデータの把握 認証評価に必要な諸データの割り出し 新たな全学としての集積データ項目の決定 上記～のデータの分析と政策提示 上記～を遂行するうえでの、各部局との連携

本年は、主に上記主任務～を目標に、計4回の会議、ワーキンググループ内のプロジェクトチームによる試験的な取組、他大学の事例調査などを実施してきた。以下、その概要を「中間報告」として報告する。

主任務 について

一般的なIRの定義・役割を確認した上で、先進的な国内外の事例を学んで、本学におけるIRのあり方について種々検討を重ねた。

- ・ 早くから高等教育界にIRが根付いている米国の大学においても、その役割は多様である
- ・ IRを名乗る部門を設置し、活発に活動を展開しているようにみえる国内の大学においても、その大学内における立ち位置が定まっていないところが多く、目立った成果を上げている事例はほとんどない
- ・ 部門の設置や人員の配置、設備投資をすることで何かが回り始めるわけではなく、教育の質を保証する上で何が必要で、どういう役割・権限を与えるのか、他の事例にとらわれない大学独自の方針が必要である
- ・ 本学の方針については、主任務以降の経過も踏まえつつ、引き続き議論を継続していく

主任務 について

事務局各部協力のもと、既存諸データの掌握につとめた。

- ・ 各種調査報告用の帳票一覧

- ・ 既存システム内の出力可能帳票一覧
 - ・ 帳票にはなっていないが、各部独自で定期的に収集保管している情報の一覧
- これら多種多様な情報の中で、今後必要となるデータを割り出すためには、前述の大学の方針をまず定める必要がある。

主任務 について

先に策定された共通科目のラーニング・アウトカムズに続き、各学部のラーニング・アウトカムズを策定。これらにもとづき、何をもって学習成果を評価するか今後検討される。

主任務 について

上記主任務 で掌握した各部局のデータを活用し、どのように認証評価に備えるか検討。現段階で一度に多くのストーリーを語るのは困難なため、I R という組織がデータを活用して何ができるのか、プロジェクトチームで試行的に調査した。

- ・ 授業アンケート質問項目間の相関およびG P A との関連

現状のような個人を特定できないアンケート結果では分析に限界がある。来年度は記名式で実施できるよう、提案することとなった。

- ・ 留学状況

国際課から入手した全体の人数だけでは分析はできないため、串刺しデータをもとに、留学希望者の科目選択特性などを分析する必要がある。現状の串刺しデータには交換留学のデータのみ含まれているが、私費留学についても、教務に届けられる休学理由や国際課に提出される留学届をもとに掌握は可能であることが確認された。

- ・ 低G P A 学生の特徴把握

成績不振学生への面談は実施しているが、現状はその面談結果がいかされていない。面談報告書のフォーマットをデータ分析しやすいように改良し、本年3～4月には使用できるよう準備していくこととなった。

その他

上記の取組・検討に付随し、主に下記にあげた事項についても現在検討をしている。

- ・ 入学から卒業までの一貫データ（串刺しデータ）について

卒業後にまとめたデータのみではなく、今後は途中経過も観察できるよう対応を検討中。また、これまでのようなプロジェクトチーム体制ではなく、主管部署を明確にすべきか否か事務局で検討中。

- ・ I R コンソーシアムへの参加について

同志社大学・北海道大学・大阪府立大学・甲南大学の4大学のI R ネットワークによって開発されたI R システムを相互利用する、I R コンソーシアムが設立される。本学も参加すべきか否か検討中。

- ・ 今後の学生アンケート調査の在り方について

学生アンケートはW e b ベース（ポータル）で実施しているが、回答率が悪く、ゼミを活用して紙媒体のアンケートに切り替えることも選択肢の一つと考えられる。今後さまざまなアンケートに対応できる、汎用性の高いシステムの導入を検討中。

以上